

「人間科学会」の創設に際して

平井啓之

文学部の発足とともに、「英語英米文学会」「国際文化学会」「人間科学会」の三つの学会が誕生し、それぞれの学会がその成果の発表機関として「学会誌」を発行できることになったのは、月並みの表現ながら、まさに御同慶の至り、と言うべきであろう。

文学部は現在、英語英米文学科と国際文化学科の二つの学科を擁していて、「人間科学会」以外の二つの学会が、学部を構成する二つの学科と直接につながっていることは、その名稱の示す通りであろう。だが、学科系列とはやや離れた形で「人間科学会」が設立されたのには、それなりの必然性が確固として存在する。

私は縁あって、三年前に本学の教員スタッフの一員となったが、所属は経済学部であった。しかし、社会科学系の三学部を横断して構成される一般教育懇談会があり、一般教育を担当する教員スタッフの充実ぶりには感心させられたものである。そのことはまた、本学に独立の人権講座が設けられているという見識にも通うものであったことは勿論である。まずそのような本学の歴史的な文脈を受けついでいる点に、「人間科学会」の誕生の必然性があったと言うべきであろう。

さらに、最も新しい学問の展開の可能性が、在来の専門諸学の壁を打ちやぶる学際領域にある、という認識は、程なく二十一世紀に雪崩れこもうとするこの1989年末において、ますます根拠あるものとなりつつある。その場合のキー・ワードは、抽象的でありながら具体そのものでもある「人間」を措いてはないと、私は敢えて確言したい。

こうして「人間科学会」は、桃山学院大学の歴史的な文脈と、未来を拓く学

問的展望とを根拠として生まれたことを確認しておきたい。

学会誌『人間科学』には、当然、若手研究者の自由奔放な活躍が期待されるし、同時に、それが、私のような老齡者が発想を活性化するための貴重な場ともなれば、と希う。

1989年12月10日